



Title	倉橋由美子と楊沫の小説比較研究：『パルタイ』の「わたし」と『青春の歌』の林道静を巡って
Author(s)	朴, 銀姫
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2002, 36, p. 53-70
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47900">https://hdl.handle.net/11094/47900</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 倉橋由美子と楊沫の小説比較研究

—『パルタイ』の「わたし」と『青春の歌』の林道静を巡って—

朴 銀 姫

### はじめに — 研究動機及び問題意識

倉橋由美子と楊沫は、一九五〇年代末から一九六〇年代初期という極めて濃厚な政治的雰囲気に覆われた時代に、創作活動を始めた女性作家である。そして、性と政治は、常に一人の小説のモチーフとなっていた。その主な作品には、倉橋由美子の『パルタイ』、楊沫の『青春の歌』などがある。若い女性と男性党員との恋、恋人を媒介にした政治との接触、これが二つの作品の共通点であるが、ヒロインたちの恋の行く手は逆方向に向かう。

倉橋由美子のデビュー作『パルタイ』と、楊沫の作家としての立場を固めた『青春の歌』の、発表当時の反響は大きかった。一九五九年八月に書かれ、芥川賞候補作品、第十二回女流文学賞受賞作品となつた『パルタイ』は、その観念的形象の創造、反リアリズム手法などで話題を呼んだ。一九五八年一月から『北京日報』に連載された楊沫の『青春の歌』は、ヒロインの恋愛関係などの問題をめぐって、忽ち社会各領域に激しい論争を巻き起こした。

ボーヴォアールの『第一の性』を肯定した倉橋由美子は、その第二の性を基盤にそれを超える第三の性を描いた。<sup>(2)</sup>一方、マルクス・レーニン・毛沢東思想の影響の下で、男女平等を夢見ていた楊沫は女性英雄像を描いた。『パルタイ』と『青春の歌』に見られる、倉橋由美子と楊沫の女性観、政治観はそれぞれ作家個人の特有のものでありながら、日中両国女性たちの女性観、政治観の一般性を帯びる。またそれが現在に繋がるものであるが故に、『パルタイ』と『青春の歌』の分析を通して、日中両国女性たちの女性観、政治観を垣間見ることができる。それは今だからこそ偏見を捨てて俯瞰することのできる問題でもある。

### 一、性の提起

本論文で言う性とは、（男女の）性別の意味、具体的には女性を意味する。倉橋由美子と楊沫は、小説を通して女性という状況、女性の生きる可能性について追究してきた。女性という性別を問うには、極めて当たり前のことだが、女性と相互包含対立関係である、男性を問わないわけにはいかない。そのため倉橋由美子と楊沫は小説の中で、色々な男性像や男女間の関係、性的行為などについて繊細に描いた。

#### ① 「パルタイ」の「わたし」——第三の性

倉橋由美子の『パルタイ』の「わたし」には、後の作品の女性像が集約されている。

小説は「わたし」が「あなた」に話しかける、というユニークな語り方を探つていて、「あなた」に話しかけている「わたし」は、「あなた」と対等な人物として、「あなた」と一緒に登場した。パルタイに入るか入るまいかの

選択権は「わたし」にあって、「あなた」にはそれを操ることができない。「わたし」は今自由を縛られることによつて一層幸せを感じるために、パルタイに入ろうとしている。そして、その意志を「あなた」に伝える。だが、この時「わたし」には、「あなたが眼鏡を光らせすぎた」<sup>(3)</sup>ため、その向こうにある「あなた」のまなざしが見えなかつた。つまり、「わたし」と「あなた」の関係には曖昧なところがあつた。これを前提に物語が展開していくが、「わたし」は終始主体であり続けた。

「わたし」は「仕事にはなかなか熱心だった」(十一ページ)し、「あなた」のなかま《労働者》を理解するためには、積極的に《労働者》に近づき交わりをした。また、《経歴書》の問題を巡つて「あなた」と口論をするが、「わたし」は自分の意見を主張し続けた。このことによつて「あなた」と「わたし」の関係はますます対立していく。そしてついに「わたし」は、「いまではパルタイにはいらない決心をした」(二九ページ)と、「あなた」にまたその意志を伝える。その時、「わたし」は「はじめてあなたの眼がひどい斜視であることにきづいた」(二九ページ)。「さらさらした頬の肉、太い首、眼鏡、それらはそれ自体としてそこにあり、いまではわたしにとつてなんの意味ももたなかつた」(三〇ページ)。些か神秘的で、尊い存在に見えた「あなた」は、今や蔑ろの存在となつた。「あなた」を「ほとんど完全な程度にあいしていた」(十ページ)「わたし」は、決して完全に「あなた」に従うことなく、決然と「あなた」を離れていく。

## ② 「青春の歌」の林道静——女性英雄

楊沫の『青春の歌』は、家出をした女子学生が列車に乗つて、窓外のひろびろとした緑の平原を望んでいる場面

から始まる。妾の娘だった林道静は、父と正妻がその容貌を発見してくれるまで、「毎日通りに出でては石炭ガラひろいの子供たちと一緒に遊び」、「夜は使用人と一緒に寝かされた」、ただの汚い子供であった。だが、父の言うよう、「女子才なきは徳なり」というのはもはや時代おくれとなり、容貌と学歴は当時のモダンガールが金持ちで勢力家の男のもとへ嫁ぐための絶対条件だったので、親は道静を女子学校へやつて、「金になる木に」しようとしていた。

親が取り決めた婚姻を拒んで家を出たにしても、道静は頼れるところはなかつた。進退窮まって海に身を投げようとした時、北平大学の学生余永沢が現れた。二人は愛し合い同棲生活を始めた。愛の溢れる小家庭は道静に幸せを与えてくれた。ところが、毎日雑多な家事に追われて、好きな読書もできなくなつた道静は次第に倦怠を感じ始めた。それに、親の意思に従つて既に結婚していた永沢は、恋愛結婚には憧れていたものの、彼が求めていた女性は良妻賢母であつた。夫は家事に影響を与える妻の社会活動に反対した。従順のみを望ましいとする鳥籠は、道静に絶望を感じさせた。

その時、道静は共産党員の芦嘉川に出会つた。嘉川はまず、「女が貞操を守らないといって、一番攻撃するのは、妾を三人も四人も持つてゐる道徳家」(一一〇ページ)を批判した。次に、小家庭の安逸を図つて妻を家庭の中に閉じ込める余永沢を説得しようとした。そして道静をデモに誘い、家庭という小世界から飛び出て革命に参加して「成長」するように、と道静に勧めた。老夫子(時代遅れの知識人)永沢に決然と別れを告げた道静は、積極的に嘉川に随つて革命活動に加わつた。道静は心から嘉川を愛してはいたが、嘉川が獄死した噂を耳にした。

希望を失つたむなしさと身寄りのない孤独感で、耐え難き日々を送つてゐる道静のところに党員の江華がやつ

て來た。道静は久しく別れていた嘉川に逢つた氣持ちで嬉しさを隠せなかつた。「よく似ている二人」であつた。

江華の指導の下で道静の「成長」は速く、ついに入党した。だが、革命は極めて困難であつた。国民党長官の説得と金持ちの誘惑もあつたが、女性を人形のように操り、妾を娶る彼らに道静はちつとも興味を持たなかつた。一緒に革命活動を行なううちに道静と江華二人は情が深まり、「革命夫婦」となつて、肩を並べて革命運動に加わつた。江華は前の夫余永沢とは違つて家事もよく手伝つてくれた。そのような江華の支持があつて、道静は「共産主義戦士に成長」することができた。何度も逮捕され死を覚悟していた道静は、その度秋瑾など女性革命家、芦嘉川など革命英雄の形象に自分を重ねてみた。

要するに道静は、過去に清末挙人であつて、近代の黎明期には私立大学を運営するハイカラな紳士である親に、初めて女という性を与えられた。道静にとつて新学（西洋の学問）者は挙人と何の変わりのない抑圧の制度であつた。そして、親の強制から逃れて自由恋愛結婚をしたわけであるが、所謂夫婦愛を基盤にする近代小家庭を築いた。だが、個性解放（女性解放を含む）を主張する一方、女性の内的役割に固執する永沢によつて、道静は性的分別を決められた。道静は妾を娶る父を封建的家父長と解つた。その理に従うと、開明紳士の面をかぶつた父とは違つて、「東西の近代文学に詳しく」、小家庭の幸せを図る永沢は近代的家父長であるといえよう。その父と夫が道静に拒まれた。道静はあこがれの新家庭——中国現代家庭を築こうとした。つまり、社会と家庭における男女平等という神話を作り上げたのである。

『青春の歌』の道静と江華の平等関係は、『パルタイ』の「わたし」と「あなた」の対等関係と、その出発点にお

いて共通点を持つ。『青春の歌』の平等関係は、抑圧に抗つて獲得した女権である。『パルタイ』の対等関係は、「女でありながら女であることに居心地のわるさを感じる」<sup>(5)</sup> 倉橋由美子の劣等感を裏付けにしたものである。いずれも男性より低い女性の地位を物語つているが、さらに、「性は与えられた」<sup>(6)</sup> とする点においては倉橋由美子の観点は楊沫と一致している。倉橋由美子の劣等感は、かつて同じ儒教文化圏<sup>(7)</sup>にあって、早くも近代を完成して東アジア諸国のモデルとなつた日本の――上述した中国近代家父長制と似通つた（ここで相違点は排除する）――近代家父長制を背景にしている。

しかし、『青春の歌』の道静と江華の平等関係は、道静が政治活動に参加することと江華が家事を手伝うこと、つまり、女性の半男性化と男性の半女性化を条件に成り立つものである。この男女平等関係を維持していくために、道静は女性英雄にならなければならない。『パルタイ』の「わたし」と「あなた」の対等関係は、「わたし」の終始一貫した明晰さによつて成り立つてゐる。自分の主張だけを貫こうとする「あなた」に「わたし」は決して妥協することがない。そればかりか、「あなた」を嗤うことによつて、「わたし」は自分を正当化する。それが即ち倉橋由美子のいう「第三の性」<sup>(8)</sup>である。第三の性と女性英雄の相違点は、政治との関わりの中で一層具具体化して行く。

## 二、政治の時代

『パルタイ』と『青春の歌』が発表されたのは、恰も「冷戦」の最中であつた。そもそも「冷戦」とは米ソ冷戦を始めとして、共産圏国家対資本主義国家の冷戦を指す場合が多い。<sup>(9)</sup> 資本主義国家による反共運動と社会主義中国の反右派運動の白熱化がその典型的な例である。その頃日本では安保運動が高潮に達し、それに対する政府の鎮圧、

日本共産党の内部分裂など政治的事件が起きていた。<sup>(11)</sup>個人の生活と人生を丸ごと巻き込んだ政治運動の中で、党の最高指示に従うのみが生き残るための条件であつた中国知識人の状況に対し、農民運動を研究することで「『アカ』よばわり」した日本知識人<sup>(12)</sup>の場合もあつた。では、倉橋由美子と楊沫はその時代をどう受け止めたのか？

### ① 倉橋由美子と時代

倉橋由美子の自作年譜によると、一九五九年六月、世間は「その頃から『安保』騒動で騒がしくなつたが、まったく無関心で、相変わらず」（『倉橋由美子全作品7』新潮社、一九七六年五月、二二三三ページ）よく遊んで、よく読んでいた。そして、八月にはサルトルの『存在と無』を取り上げて卒業論文を書きながら『パルタイ』を執筆していた。

安保運動について氏はこう語っている。「講話条約調印の日に、教室でサンフランシスコからの『ピーピーガガガ』」をきかされたのはわたしが高校一年のときでしたが、よかれあしかれ、日本がこうしてアメリカの『目下の友人』的な地位を得て、アメリカを中心とする世界に所属することは避けられませんでした。一方、『反アメリカ帝国主義』という視点から組み立てられた『革命』の夢には、現実的な根拠がなかつたので実際面では愚劣な失敗をくりかえすほかありませんでした。わたしたちの青春は、こうして袋のなかに追い込まれていつたのですが、いまとなつてこの袋を切り裂いて八月十五日のゼロの地点から出発しなおすわけにはいかない<sup>(13)</sup>』と。サルトルの実存主義を以つて、社会に出る前の「『猶子』のなかの学生たちによる、『社会的スポーツ』」を嘲笑つていた<sup>(14)</sup>。高野斗志美が指摘したように、倉橋の左翼党を嗤う気持ちは、上記のような時代背景下のものでもあつた<sup>(15)</sup>。

② 楊沫と時代

楊沫が北平左聯の陸万美に出会ったのは、一九三三年春節の日、妹白楊<sup>バイヤン</sup>の家であった。当時売れっ子の女優であった白楊<sup>(16)</sup>の家には、映画界のモダニストたちを始めとして、左聯の人たちと北平大学の学生（その多くは東北からの逃亡青年であった）たちが集まつて來た。楊沫は芦嘉川のモデルである陸万美から、マルクス主義とソ連の女性解放運動を紹介した本を借りてきては一心に読んだ<sup>(17)</sup>。楊沫はその初期において、マルクス主義をモダニズムとフェミニズム、そしてナショナリズムとミックスしたかたちで吸収した、と見ておいた方が正しいだろう。

一九五七年に書かれた楊沫の日記によれば、楊沫は當時「右派分子」に對して批判的な態度を表していた。楊沫は時代の波に逆らう知識人ではなかつた。一九五九年、楊沫は「党の社会主義建設の総路線と大躍進の進展に励まされて、三ヶ月を費やして『青春の歌』を修正した」。作品に反映されている歴史觀は一九五九年における楊沫のものである。

このような倉橋由美子と楊沫の姿勢があつて、なるほど二人の手によつて描かれたヒロインたちの政治解釈は異なる。

三、性と政治

「わたし」と道静は、恋人の党員男性を通して政治活動に参加した。つまり、二人にとつて政治はもともと男性のものであつた。二人のヒロインたちは積極的に政治活動に加わつたが、離れていく「わたし」と手放さない道静

であった。

### ① 「わたし」の場合——他者として

小説『バルタイ』には、「あなた」の空間と「わたし」の空間が対照的に描かれている。「あなた」の住んでいるところは、「壁の割れはじめた汚い部屋で、途方もなく巨大なビルディングの中の迷路の奥」（九ページ）にあつた。それは『寮』と呼ばれているビルディングで、「厚い壁で区切りをつけられたながらもかえつてその壁を鞆帯にしてたがいに結合されている」（同上）細胞の集合体、異臭の充満している、「わたし」には決して慣れることのできない空間であつた。そして「あなた」の行く空間というのは、潮風のあたるゴミ捨場の横のバラックや書店の屋根裏など、陰気臭い空間であつた。

一時ごろK市についた。曇天から薄日がさして蒸し暑かつた。陸橋を渡りながら下をみると、貨物専用のレールがいくつかの立体交叉をなして放射状にひろがり、多くの『工場』へとひきこまれていてみえた。街は狭くて、棚をなして海へせり出し、黒い鉄板をつぎはぎしてつくられた『工場』がつぎつぎと累積して建て込んでいるのは、全体としてみると、稚拙だが魁偉な偶像に似ている。（十三ページ）

このような息苦しくて暗い感じの「あなた」の空間に比べて「わたし」の部屋は、

わたしは多少がっかりしたものをかんじながら、『寮』を出た。それから二時間ほど電車に乗つて自分の部

屋に帰ると、ただ眠った。そして朝の光がオレンジ色の希望を投げかけるころ、わたしは汗で湿った服をそのまま着て、また《寮》に出かけていった。（十二ページ）

「冷たい」、「恐怖」、「不安定」、「绝望」のイメージの黒色と、「暖かい」、「安定」、「希望」のイメージのオレンジ色<sup>(19)</sup>との見事な対照である。家族と一緒に暮らす家中の自分の部屋か、或いは一人暮らしのアパートの部屋か、とにかく「わたし」の空間であるが、それは「あなた」と口論した後、帰ってきて安らぐ空間であり、留置所で「あなた」と別れた後帰ってくる空間である。自己を表す代名詞「わたし」に対して、「あなた」は親しい間柄の呼び名から、他者を表す代名詞に変わつて行く。小説はこのよう徹底した自己確立の物語である。

「わたし」は鋭い感受性の持ち主、女性である。「わたし」はその感受性を以つて「あなた」と「あなた」のなまにについて理解しようとした。「わたし」は《労働者》という「種を異にする動物」（＝他者）、《労働者》という政治概念（＝男性）を理解するために、《労働者》と交わる。江種満子が述べたように、「わたしが労働者を理解できる」ということは、わたしにとってはわたしの労働学校セツルというサークル活動の意義の保証であり、革命＝パルタイを信ずる根拠<sup>(20)</sup>であった。女性は肉体しか持つていない、というのが倉橋の女性という性に対する喻え方である。小説に描かれている女性の肉体は、女性の肉体そのものでありながら、男性の精神世界に対する認識手段でもある。つまりそれは肉体でありながら肉体ではない。倉橋のこの観念は、肉体を最小限に縮めて「精神になつて」飛んでみようとする、後の作品『どこにもない場所』の「し」、『妓女のように』の「わたし」によつて一層展開されて行く。

『労働者』との交わりによってできた存在は、「わたし」の中で大きくなつて行くにつれて、「わたし」に吐き気を促す。サルトルの『嘔吐』の中の吐き気を思い出させる、存在への反応である。「わたし」の存在への反応はこれだけではない。『寮』、『履歴書』、『組織』、『組合』、『同志』、『革命』など、小説の中では「あなた」と「あなた」の仲間が使つてゐる言葉、その政治用語にすべて『』をつけてゐる。そのような他者の分泌物と、異臭で満たされている集団生活、組織の『なまなま意識』に「わたし」は『オント』を感じる。この『オント』はサルトル著『存在と無』の「オント」の意味と無関係ではない。つまり、「わたし」の羞恥は「あなた」と「あなた」の組織、という他者の前ににおける自己についての羞恥であつて、「わたし」は絶えず「わたし」の存在の不可能性を味わい、異臭と他者の分泌物の中で「わたし」の根源的な失態を体験する。そして、その危機から逃れるために、「わたし」は孤独な自由を求めて「あなた」と別れ、パルタイから出る手続きを始めようと決意した。

## ② 『青春の歌』の場合——社会的自我として

道静は『九・一八』事変で故郷を失つた難民が悲鳴を上げながら、南下する列車に乗つて東北三省から避難する光景を目撃した。また、仕事を探している際に、北平のある豪華な邸宅に住む日本人「旦那さま」に遇つたが、「大日本帝国」を誇る「旦那さま」は、いやらしい目付きで道静の身体を上から下まで舐めていた。道静は恥を感じ、怒りを覚えた。このような国が破れて人が亡くなり、人格が蹂躪される被害意識は、道静に愛国心をもたらした。

道静の愛国心は、女優の白莉萍<sup>（ペリピン）</sup>の家に集まつてくる逃亡青年たちのナショナリズムに合流していく。中国人なら

誰にも抗日救国の任務がある。これは不可侵な正義であり、全知の語り手が登場人物を正面人物、中間人物、反面人物と裁く、少しも譲ることのできない基準であった。その神聖たる、不可避な問いの前で、たとえ出世主義者余永沢であつても自分なりの方法（古典を研究して伝統を守る）で救国すると主張したし、国民党のスパイ、漢奸（親日派）であつても「曲線救国」を口にする。北平大学の学生たちは「反動」で、「無抵抗」を主張する国民党政府（一〇八ページ）に向かつてデモを起した。その頂点が『一二・九』運動であつた。嘉川はこの神聖たる運動の指導者であつた。

道静はそんな嘉川を尊敬していた。その尊敬心は嘉川に対する道静の肉体的好感と相伴つていた。永沢の小さなものに比べて、大きくて輝く嘉川の目は道静を魅了させた。人目を晦ますために金持ちのお坊ちゃんを演じる嘉川の背広の姿は格好いい。そんな生き生きした青年たちに比べて、終日じじむきい長杉姿で（一〇四ページ）、本ばかり読んでいる本の虫永沢は道静をがっかりさせた。この部分の描写がリアリティの手法による楊沫の無意識の発露であるとすれば面白い。ちなみに、永沢のモデルである張中行（北京大学教授）は未だに旧い綿いれの上着を着ていて話題になつてゐる。

女優の家に集まつてくる人たちの中には、愛国青年たちと学生オルグ以外に、映画界の「大芸術家」もいた。やや風刺の効いた普通名詞だけでちらつと出てくる「大芸術家」であるが、道静がマルキシズムに接する際の背景を把握するためには無視できない存在である。道静がその「大芸術家」を認識するまでも待たず、「大芸術家」は既に生き生きした青年たちの中にいた。だが、国家大事を談論しようとしない「大芸術家」は早々と姿を消されてしまつ。

日中関係が激化するにつれて、ナショナリズムが一層盛んになっていく。抗日救国を妨げる者は一切否定される。ところが、神聖たる抗日運動は女性を必要としていた。最初からナショナリズムと合体していたマルキシズムは、女性の参加を大歓迎していた。嘉川らの指導を受けて、「共産主義戦士になることを志した」道静は、「利己的な出世主義者」である夫永沢に「志が違う」という理由を堂々と出して別れることができた。道静は芦嘉川、江華らの世界に加わるチャンスを得た。マルキシズムの支持を受けるフェミニズムと、ナショナリズムとの幸せな結合であった。

中国社会において、抗日運動期のこのような三者の緊密な関係は、『青春の歌』が発表された一九五八年当時にも強化されていた。冷戦中ナショナリズムが依然として台頭している中、社会主義中国を建設するための大躍進と人民公社運動は中華人民共和国の公民なら誰にもある、抗日運動に続く神聖たる任務であった。「奇志の多い中華の娘たち」<sup>(22)</sup>は栄えある事業に投身して、「天の半分」<sup>(23)</sup>を頂いた。

勿論女性は皆「半邊天」になつたわけではなかつた。一九四二年、丁玲はエッセイ『三八節に感有り』を書いて、終日男性幹部に付き纏う女性幹部と、手足にまめができるほど生産現場で働き続ける農村の娘を対照的に描いて、解放区の男女平等制度を疑つた。だが、救国優先という情勢の下で返つて非難を浴びた。その丁玲が一九五七年に右派として倒れ、丁の文章は社会主義建設を妨げるものとなつた。その翌年に発表された『青春の歌』は周恩来の妻鄧穎超などの絶賛を受けた。茅盾が言つたように『青春の歌』は「教育価値のあるテキスト」でありえたのであつた。このように、道静＝楊沫のような女性たちによつて、男女平等制度は支持され、維持されたのである。

要するに、道静にとつて政治活動への参加は社会的自我の獲得であった。それは他民族の抑圧、封建制度の抑圧、男性の抑圧から逃れる道でもあつた。一方、もろもろの経験を通して自己を確立しようとする「わたし」にとつて、「あなた」は他者であつて、「あなた」や「あなた」のなかもたちが作り出す主義、観念は他者の分泌物にすぎなかつた。

### おわりに——研究意義及び今後の課題

『パルタイ』と『青春の歌』で確定された女性観、政治観は、倉橋由美子と楊沫の後の作品でそれぞれ一層展開されていく。倉橋由美子は『パルタイ』のテーマと登場人物に繋がりを持つ数十編の短編を創作し、後には長篇に挑んだ。楊沫には『青春の歌』三部作がある。

倉橋由美子は『パルタイ』を通して、女性の肉体性を正当化して男性の精神世界と対等な位置に持ち上げた。しかし、決して第一の性である男性と抗争したりはしない。むしろ政治に『オント』を感じた「わたし」は自分の部屋に帰つて来た。こうして「わたし」の自己は内部へと拡大していった。それが倉橋由美子のいう第三の性であった。後の作品に見られる肉体の描写も女性の正当化である。それは単なる肉体の描写ではなく、肉体と精神、形而上学と形而下学、男性と女性の相互関係についての問い合わせである。肉体の中に棲んでいる精神、物質化（肉体化）する精神がそれである。倉橋の後の小説には契約で結ばれた夫婦像が描かれている。仕事を持つ夫と主婦の妻の間には優劣がない。女性は家の中に閉じ込められたのではなくて、家の中に城を築くのであつた。

一方、道静は家事を軽視し、家を自由を奪う鳥籠として捉えた。社会に出ることは抑圧からの解放であつた。ま

た、ナショナリズムによる家事より国家大事、小家庭より国家という呼びかけの下で、社会活動に加わることによつて道靜は優越感を覚えた。だが、社会への進出は女性の無性化であった。国家、国家大事を前にして、性は取るに足りない個人、私事であつた。これが個人主義を主張する日本の事情と異なるところであろう。一九八九年に『青春の歌』の続編『英華の歌』で、再び女性の本能に触れようとした楊沫は、もはやそれを表現する適切な言葉を失つていた。

以上で倉橋由美子と楊沫の初期小説における女性観、政治観について考察して見た。枚数の制限のため、後の作品に見られる更なる展開について詳しく論じることができなかつたが、今後機会を改めて論じたい。

## 註

- (1) 楊沫（一九一四年八月二十九日—一九九五年十二月十一日）北京生まれ。本名は楊成業。生前北京市婦女連合会の宣伝部副部長、中国作家理事などに任じた。一九七九年来日訪問。主な作品は『楊沫文集』（全七巻）に収録されてある。
- (2) 倉橋由美子「わたしの『第三の性』」（一九六〇年八月）『わたしのなかのかれへ』講談社 一九七八年七月 二七ページ
- (3) 倉橋由美子『バルタイ』新潮文庫 一九七八年一月 八ページ。以下「バルタイ」の引用は当書から。
- (4) 楊沫著 島田政雄 三好一訳『青春の歌』至誠堂 一九六〇年三月 八ページ。以下『青春の歌』の引用は当翻訳書から。
- (5) 倉橋由美子「性と文学」（一九六四年三月）『毒薬としての文学』講談社文芸文庫 一九九九年七月 三六ページ
- (6) 倉橋由美子「性は悪への鍵」（一九六四年四月）『毒薬としての文学』講談社文芸文庫 一九九九年七月 四一ページ

- (7) 林玲子 柳田節子監修『アジア女性史 比較の試み』明石書店 一九九七年六月。菅野則子「江戸時代における「儒教」の日本的展開」(二二八ページ)、長島淳子「近世家族における女性の位置と役割」(三二一ページ)などの論文を踏まえた考え方。
- (8) 倉橋由美子「わたしの『第三の性』」(一九六〇年八月)『わたしのなかのかれへ』講談社 一九七八年七月 三〇ページ
- (9) 李鍾元『東アジア冷戦と韓米日関係』東京大学出版会 一九九六年三月、菅英輝『米ソ冷戦とアメリカのアジア政策』ミネルヴァ書房 一九九一年三月、西川吉光『冷戦の起源と二極世界の形成』晃洋書房 一九九八年四月などを参考にしたもの。
- (10) 陳固亭『日中韓百年大事記』(台湾)中華叢書 一九七二年五月に詳しい。
- (11) 斎藤一郎『安保闘争史』三一書房 一九六〇年に詳しく述べられてある。
- (12) 色川大吉『昭和史世相篇』小学館ライブラリー 一九九四年二月 二二六二ページ
- (13) 倉橋由美子「袋に封入された青春」(一九六〇年八月)『毒薬としての文学』講談社文芸文庫 一九九九年七月二八ページ
- (14) 倉橋由美子「学生よ、驕るなかれ」(一九六〇年五月)『毒薬としての文学』講談社文芸文庫 一九九九年七月二三二ページ
- (15) 高野斗志美『倉橋由美子論』サンリオ選書 一九七六年七月
- (16) 白楊は一九三一年十四歳の時に、北平の聯華影業公司に入つた。当映画会社は後の中国映画史上比較的大きな影響を及ぼした。当映画会社の一九三〇年代初期の作品を見ると、「古都春夢」、「都会的早晨」(「都会の朝」)、「再会吧上海」(「さようなら上海」)など一九三〇年代のモダンな都市空間、都市生活をモチーフにしたもの、「恋愛与義務」、「愛欲之爭」、「三個摩登女性」(「三人のモダンガール」)など恋愛、家庭、女性問題をモチーフにしたもの、それに官能的なものも混じついていた。
- (17) 楊沫「我一生中的三個愛人」『楊沫文集7 自白——我的日記』北京十月文艺出版社 一九九四年十月 三五三ページ

- (18) 楊沫「再版後記」『楊沫文集1 青春之』北京十月文芸出版社 一九九四年十月 六一五ページ
- (19) 岩井寛『色と形の深層心理』日本放送出版社 一九八六年一月
- (20) 江種満子「『パルタイ』のわたし」『解釈と鑑賞』一九七六年九月 二二六ページ
- (21) J-P・サルトル著 松浪信三郎訳『存在と無』人文書院 一九九九年五月 オント (honte) は羞恥の意味。  
他に吐き気、まなざしなどもサルトルからの影響である。
- (22) 毛沢東 七絶 「為女民兵題照」一九六一年二月
- (23) 毛沢東の湖南農民運動の時期から一貫した女性論。一九五九年には(『南方日報』一月十八日)、「家事労働から解放されれば、女性はこんどこそ知的能力をたかめ、思想的な先進をとげる」、「女と男が公社で一緒に働き、その労働に応じて支払いをうければ、父親や夫による支配の時代は終わりをつげる」と論じている。

(大学院後期課程学生)

仓桥由美子与杨沫小说比较研究  
——以《党组织》的〈我〉与《青春之歌》的林道静为中心——

朴 银姬

仓桥由美子与杨沫是从政治气氛极为浓厚的一九五〇年代末开始从事写作活动的女作家。所以，二位女作家常以性（指性别。包括男女关系以及性行为）与政治为小说的主题。其代表性的作品有仓桥由美子的《党组织》和杨沫的《青春之歌》。两个作品公之于世后所引起的反响都很大。两个作品都以年轻女学生为主人公，描写了年轻女性和党员之间的爱情故事以及年轻女性通过情人接触党组织的过程。女主人公〈我〉和林道静都很积极参加党的各种政治活动。但由于俩个人对党组织和政治活动的理解不同，因此迎来了不同的故事结局。

仓桥由美子受到了萨特的存在主义影响。因为个人的存在受社会诸关系的压抑而不能得到真正的自由，因此要经过与此的斗争才能得到存在的价值。在这种观念的影响下，仓桥由美子通过《党组织》首先确认了〈我〉的存在。对〈我〉来说〈你〉和你的同志还有〈你〉的党组织都属于他人，〈你〉和〈你〉的组织所主张的主义只不过是他人的排泄物而已。为了自由〈我〉拒绝参加政治活动，断然离开了〈你〉和党组织。

杨沫深受了马克斯主义唯物辩证法的影响。唯物辩证法主张个人必须在社会诸关系中才能得到存在的价值。林道静投身于社会政治活动，想在社会诸关系中充实自我。

仓桥由美子认为，女人是被磨练的，而不是生就的。换句话说女人是在儒家父长制或者在近代家父长制下所被造出来的。在这一点上杨沫也是同样的。但仓桥由美子把女人作为第二个性，塑造了与男人这第一个性互不相争，但绝对保持对等关系的第三个性，而杨沫塑造女英雄形象编写了男女平等的神话故事。对道静来说，离开家庭参加革命意味着从被其他民族的压迫下解放出来，意味着从被封建制度的压迫中解放出来，也意味着从被男人的束缚中解脱出来。这与杨沫所处的历史背景不无关系。从一九三〇年代末到一九七〇年代末，在中国女性主义与国家主义和马克斯主义是紧密地联系在一起的。

关键词： 第三个性 女英雄 党组织 政治活动 女性主义